

## コリントの信徒への手紙 1、2 「土の器に宿るキリストの命」

司祭 ヨハネ 井田 泉

コリントはギリシアの大都会です。パウロは第2回の宣教旅行のときにコリント教会の基礎を築きました（使徒言行録 18:1-18）。その後コリント教会は発展しましたが、富める者、力ある者たちの横暴と貧しい人たちの疎外（コリント一 11:22）、教会の分裂、生活の墮落、礼拝の混乱（一 12:3、14:33）、福音の歪曲といった問題がはなはだしくなりました。パウロはこれを心配し、あるべき信仰と生活を回復させるために、情熱をこめて数度にわたって手紙を書きました。「ローマの信徒への手紙」とは異なり、ここにはパウロの感情が前面に出ています（例えば一 4:8 - 21）。



パウロのコリント滞在は紀元 50 年頃で、第1の手紙は 54 年頃エフェソで書かれたであろうとされています。

### 1. 「使徒言行録」に記されたパウロのコリント宣教

使徒言行録（18:1-18）に記されているパウロのコリントでの活動を少し見ておきましょう。パウロはアテネを去ってコリントに行きました。ここで彼は、ローマを退去させられてコリントにやってきたアキラとプリスキラというクリスチャン夫妻と出会いました。パウロはテント造りを仕事としており、この夫妻も同じ仕事であったこともあって、パウロは二人の家に住み込んで一緒に仕事をするようになりました。パウロは土曜日の安息日ごとに、ユダヤ教の会堂でイエスが救い主（キリスト）であることを熱心に論じました。

パウロは激しい抵抗に遭いましたが、やがて会堂長クリスポとその家族が、一家をあげて主イエスを信じるようになりました。ほかにも多くの人々がパウロの言葉を聞いて洗礼を受けました。

しかし迫害の激しさや多くの困難に直面して、パウロは意気消沈することがありました。彼はイエスの名を呼び、切に助けを求めたに違いありません。こう書かれています。

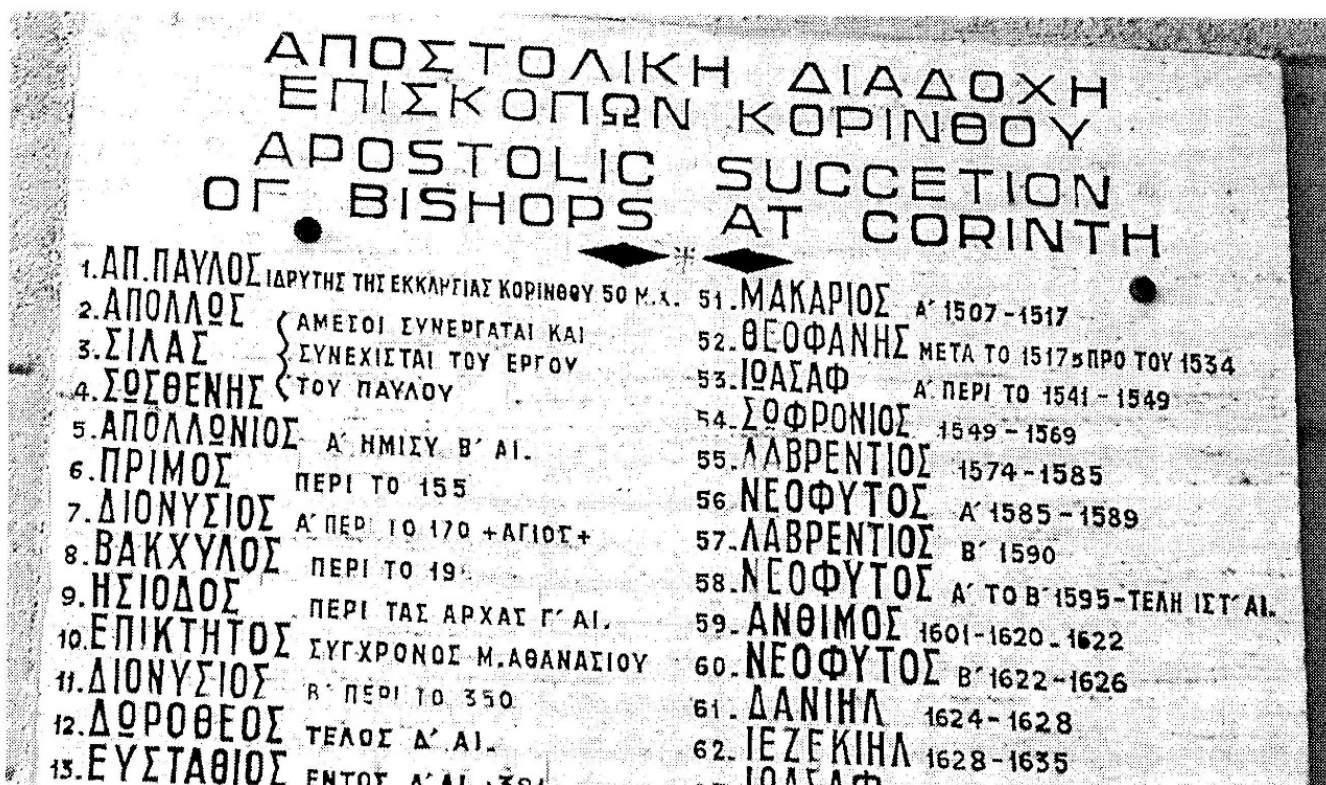
「18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。10 わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。』」

結局パウロは1年6ヵ月コリントにとどまって、人々に神の言葉を教えました。

あるときユダヤ人たちの集団がパウロを襲い、捕らえてコリントの法廷に引き立てて行き、パ

ウロの罪を訴えました。しかしアカイア州の総督ガリオンはこれを取り上げようとしませんでした。怒った群衆は、ソステネという会堂長を捕まえて殴りつけました。ソステネがユダヤ人の指導者的存在でありながら、非協力的だったからでしょうか。先ほど、クリスポが会堂長であったことが書かれていましたが、ソステネは同僚の会堂長なのか、クリスポの後任なのかわかりません。このソステネの名前が、コリントの信徒への手紙一の冒頭に出て来ます。同一人物であるかどうかはわかりませんが、もし同一人物であるなら、彼もイエスを信じる者となり、パウロの同労者となったことになります。

次の写真をご覧ください。現在のコリント教会入口にあるコリントの監督（主教）歴代表です（立教大学キリスト教学会『キリスト教学』第51号、2009所収の佐藤研氏の論文「アポロ伝承小史」から拝借したもの）。



現在のコリント教会入口の「歴代監督表」。2行目にアポロの名前がある。

標題は、聖公会風に訳せば、「コリントの主教の使徒的継承」です。初代が使徒パウロ、第2代がアポロ、第3代がシラス、そして第4代がソステネとなっています。

## 2. 第一の手紙の挨拶

「1:1 神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、」 このように、手紙の冒頭、差出人としてパウロとソステネが連名になっています。

「1:2 コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。」

「コリントにある神の教会へ」。教会は現実には人間の集まりであり、さまざまな葛藤や問題が生じます。とりわけコリント教会はそれが深刻でした。しかし教会は本来神さまのもの、神によって集められ、共に神と出会う場所です。「神の教会」という言葉に、パウロの思いが込められています。

「わたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人」。かつてパウロはコリントにおいて、困難と危険の中から主イエス・キリストの名を呼び求めました。それに対して先ほど読んだとおり、主は幻の中でパウロに言われました。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる」。「主の名を呼び求める」というのは、単なる挨拶の言葉ではなく、パウロにとってもコリントの人々にとっても、今もこれからも切実な、現実的なことなのです。思えばパウロの回心と新しい生涯は、主イエスから「サウル、サウル」と呼ばれたことによって、そして彼のほうからもイエスの名を呼ぶことによって始まったのでした。

「1:3 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

この冒頭の挨拶のわずか3節の中に「イエス・キリスト」ないし「キリスト・イエス」という言葉が、新共同訳では5回繰り返されています。ギリシア語原典で数えても4回ありました。この繰り返しの中に、パウロのすべての思いの中心がイエス・キリストであることが感じられます。コリントの会堂でパウロが熱心に語ったのは、イエスこそが救い主（メシア＝キリスト）である（18:5）、ということでした。

あらゆる彼の手紙がそうであるように、コリントへの二つの手紙もまた、祈りで始まり祈りで閉じられます。

### 3. 成長させてくださる神

パウロが非常に心配しているコリント教会の問題の一つは、教会内の不和、争いです。手紙の冒頭の挨拶、祈り、感謝を終えると、彼は直ちにこのことについて語り始めます。

「1:10 さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。11 わたしの兄弟たち、実はあなたがたの間に争いがあると、クロエの家の人たちから知らされました。12 あなたがたはめいめい、『わたしはパウロにつく』『わたしはアポロに』『わたしはケファに』『わたしはキリストに』などと言いつつ合っているとのこと。13 キリストは幾つにも分けられてしまったのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。」

「ケファ」というのはペテロのことです。コリントの教会内にはっきりした「パウロ党」とか「アポロ派」といった党派があったとは必ずしも考えられません。しかし力を振るおうとする人、教会内で影響力を持とうとする人たちが、それぞれパウロ、アポロ、ケファなどの名前を担いで自分の正当性を主張して争っている、という嘆かわしい事態が生じていたのです。

ギリシア語原典を見ると、「わたしはパウロに」「自分はアポロに」「わたしはケファに」……

は、**ἐγώ**「エゴー」「エゴー」「エゴー」、「わたしは」「わたしは」「わたしは」……という一人称単数主格の代名詞が強い響きを持って連続しています。この強い「エゴー」の陰に、キリストは霞んでしまっているかのようです。霞んでいるどころか、そのような分裂の争いによって、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」、あなたがたはキリストの体をばらばらに分断してしまっているのではないか、とパウロは言うのです。

ここからパウロは、イエス・キリストの十字架に人々の関心を向けさせようとしています。

「1:22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」

キリストは低くなられ、体を裂かれ、血を流して死なれたのに、どうしてあなたがたは自分を頼みとし、自分と自分の力を誇ろうとするのか。

「1:27 神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。28 また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。29 それは、だれ一人、神の前で誇る事が無いようにするためです。……31『誇る者は主を誇れ』……」

そもそもパウロとアポロとケファは仲違いしている訳ではありません。協力者どうしなのです。

「3:5 アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。6 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」

6節の「わたしは植え、アポロは水を注いだ」は植物、あるいは野菜か果物を育てる譬えですが、「水を注いだ」と訳されているのは **ποτίζω** (ポティゾー) という言葉で、「水を飲ませる」というニュアンスがあります。パウロの「植える」働きも、アポロの「水を注ぐ=飲ませる」働きも、愛情をこめて、心を一つにしてなした働きです。しかも「成長させてくださった」、あなたがたを、コリントの教会を成長させてくださったのは、神さまご自身なのです。

この後、パウロはさらに激しい言葉を用いつつ、コリントの人々を信仰の原点、教会の原点に立ち戻らせようとしています。愛を注いで育ててきた教会がこのようなままであるのは、パウロには耐えがたいことです。

ところでこの時期は今のような聖餐式が確立される前のことで、「主の晩餐」と呼ばれる礼拝兼食事が教会生活の中心だったようです。その際、力を持った裕福な人たちが先に集まって食べてしまい、後から来た貧しい人たちが恥ずかしい思いをする、ということが起こっていました。コリント教会内の力争いの陰にこのようなことが生じていることを知ったパウロは、「11:33 わたしの兄弟たち、……食事のために集まるときには、互いに待ち合わせなさい」と、特に裕福な人たちに対して具体的な勧めをしています。

#### 4. 聖霊の賜物

コリントの教会のひとつの特徴は、霊的熱狂、礼拝や集会における感情的高揚でした。神の力、聖霊による強い励ましや促し、感動を経験するのは尊いことです。しかし霊的熱狂には危険なものが潜んでいる場合があります。神によらない興奮や熱狂というのがあるからです。コリントの教会の礼拝は強い高揚、感情の高まりがあり、その中に混乱も起こっていたようです。

「12:3 ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも『イエスは神から見捨てられよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」

「イエスは神から見捨てられよ」は、もっとはっきり訳せば「イエスは呪われよ」です。実際にこんな言葉が、コリントの教会の礼拝で飛び交ったかどうかはわかりません。しかしパウロは、人の感情的高揚と聖霊の働きを峻別するように促しています。「イエスは主である」は最も簡潔で中心的なキリスト教の信仰告白です。そのように人の心を開き、認識させ、告白させるのは人間の力ではなく聖霊なのです。

少し続きを読みましょう。

「12:4 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。5 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。6 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。8 ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、9 ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」

こうしてパウロは、それぞれが自分に与えられている霊の賜物に気づき、それを謙虚に発揮活用する（ささげる）ようにと願い求めます。それは「一つの体」（12:13、20）である教会を形成するためにこそ、ひとりひとりに与えられたものなのです。

聖霊の多様な賜物について語った後、パウロは「もっと大きな賜物」、「最高の道」（12:31）を示します。それは「愛」です。コリント第一の13章は「愛の賛歌」として知られている箇所です。

「13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

正直に言うと、わたしはこの「愛の賛歌」が必ずしも好きではありませんでした。こういう愛は自分にはない。無理なことを強制されているような気がして落ち着かなかったのです。しかし

ある時期に、これはわたしの愛ではなく、わたしを愛してくださる神の愛、イエス・キリストの愛であることに気づきました。

「13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」

昔の鏡はおぼろにしか映らなかった。神のこともイエスのことも自分のことも人のことも、今はおぼろにしかわからないかもしれない。

「だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。」

しかし将来、わたしたちは顔と顔を合わせて見る。イエスを見るのです。わたしたちを愛してくださった救い主イエス・キリストと顔と顔を合わせてはっきり出会うのです。

「わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」

わたしたちは神のこと、イエスのことを今は一部しか知らなくとも、今すでに神は、イエスは、わたしたちのことをはっきり知っていてくださる。すでにわたしたちを知っていてくださる方を、その時わたしたちははっきりと知る。幸せな将来がわたしたちに用意されています。

「13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

この言葉を今年、創立 130 周年を迎えた奈良基督教会の年間聖句としています。

ところで、今年ルターの宗教改革開始からちょうど 500 年の記念の年です。この 10 月 31 日  
がその記念日です。わたしたちの聖公会という教会は、宗教改革を行ってローマ・カトリックから独立した教会ではありますが、かなりのカトリック的伝統を継承しているためか、必ずしも強く宗教改革 500 年を意識していません。しかしわたしはこの機会に一言触れたい。それは聖公会の源、イングランドにおける宗教改革の重要な発端となった英語への聖書翻訳者ウィリアム・ティンダル (William Tyndale 1494~1536) 司祭のことです。

彼は当時の人々の魂の渇きを癒そうとして、原典から聖書を英語に翻訳しました。彼の生涯を紹介した DVD を数年前に見たことがあります。"GOD'S OUTLAW" (神の無法者) —— 神から遣わされた秩序破りの人間、というくらいの意味でしょうか。彼は当時厳禁されていた聖書翻訳に取り組みました。イングランドは危険なので大陸に渡り、ベルギーで翻訳を続け、彼の英訳聖書が英国に持ち込まれて飛ぶように売れました。しかしやがて彼は逮捕され、火刑となります。

その DVD の中に、彼の翻訳が印刷されて、紐に掛けられて乾かされているとき、その一部が朗読される場面があります。それがこのコリント前書 13 章「愛の賛歌」の箇所なのです。その朗読が非常に美しい。聖書が朗読されるだけで聖霊が働き、心が慰められ、平安を与えられる気がします。願わくはわたしたちの礼拝においても、聖書朗読が、祈りの言葉が、人の力によらず聖霊が働いてくださる時となることを願います。

## 5. キリストの復活

第一コリントの中心はいま読んだ 13 章だ、と考える人も多いようです。しかし内容的には 15 章に記されたイエス・キリストの復活が決定的に重要だとわたしは考えます。

「15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、5 ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。……8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。」

このあと、パウロはこう言います。

「15:16 死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずですが。17 そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることとなります。18 そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。」

これは奇妙な言葉だと、学生時代は思っていました。「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかった」。何のことでしょうか。ある時点で理解が行きました。キリストが復活したのは、人を（つまりわたしたちを）復活させるためだと。イエス・キリストが復活した。それで終わりではないのです。キリストの復活には目的があり、意味がある。それはわたしたちを復活させる、わたしたちを新しい命に生かすことです。わたしたちと無関係にキリストがひとり復活しても意味がない、というのです。

「15:20 しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。21 死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22 つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」

アダムが死んですべての人が死ぬことになった。しかしそれより重要なのは、キリストが復活してすべての人が復活することになる。これについては前回、「ローマの信徒への手紙」の「アダムとキリスト」の項で取り上げましたので、そちらもご覧ください。

パウロの存在と働きにおいては、キリストの十字架の死と復活が常に伴っています。もっと言えば、キリストの十字架と復活が彼の中に食い込んでいます。ここで詳しくパウロの復活理解について説明することはできません。ただ次の言葉に触れておきましょう。

「15:57 わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58 わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですが。」

この確信、この励ましの根拠は、イエス・キリストの復活の事実、復活の主の現臨です。

## 6. 土の器に宿るキリストの命

第二の手紙から、今日のタイトルに関することだけは触れたいと思います。

「4:1 こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。……5 わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。……6 『闇から光が輝き出よ』と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。」

「土の器」とは、まずはパウロ自身のことです。「土」は弱さ、もろさ、はかなさを意味します。ここで思い出すのは、神が最初に人を造られたとき、「土の塵」から造られたことです（創世記 2:7）。しかし神はその人に、ご自身の命の息を吹き込まれました。もう一つ思い出すのは、理不尽な苦難の中に置かれたヨブの姿です。

「2:7 サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。8 ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。」

この「素焼きのかけら」と訳されたものが陶器、まさに土の器です。自分はこのようなもろく惨めな土の器に過ぎない。しかしその土の器たる自分の中に、神はすばらしい宝を納めてくださった。その宝とは、「福音」のこと、また「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光」です。神からの光、また神を知る光が自分の中に宿されている。

そのような宝を宿していることは、一方では非常な苦しみを伴います。

「4:10 わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」

パウロはイエスの死を体にまもっているがゆえに、死ぬほどの苦痛を自分も免れることができない。この「イエスの死」は単なる死ではなく、**νέκρωσις**（ネクローシス）「殺害」という言葉が使われています。イエスを憎んだ憎しみ、イエスを迫害した迫害、イエスを殺した殺害、それと同じものがパウロを苦しめ続けているのです。しかしそれで終わりではありません。この主と共に苦しむ苦しみをとおしてこそ、イエスの復活の力、限りないキリストの命が彼に注がれ続けている。そのゆえにパウロは読者にこう語ります。

「4:14 主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」

神は、人間的な誇りや力の争いに陥ったコリントの人々を一度打ち倒されるかもしれません。しかしそれを経てこそ、コリントの人々はイエスの復活の命を経験するでしょう。そうして彼らは、神に愛されている者として、パウロと共に神の前にしっかりと立たせていただくのです。

「4:16 だからわたしたちは落胆しません。」

第二の手紙の最後は、祝祷として用いられている祈りです。それをもって締めくくりとします。

「13:13 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。」